

キミ子方式と韓国の美術教育事情

松本 昭彦 (愛知教育大学美術教育講座)
伊藤 仁香 (愛知教育大学大学院 芸術教育専攻)
(2007年10月31日受理)

Kimiko Method and Circumstances of Art Education in South Korea

Akihiko MATSUMOTO (Department of Visual Art, Aichi University of Education)
Mika ITO (Graduate Student, Art Education, Aichi University of Education)

要約 2005年、韓国における「児童美術研究の集まり」の会員約1,700名を対象にした「美術教育で重点を置くべき能力は何か」というアンケート調査で、「自分の思いを創意的に表現する能力」とする回答が最多を占めた。それには、教育課程(日本では学習指導要領)の美術編教科目標に記された「創意性を啓発し」の一言の影響が色濃く反映されていると思われる。しかし2006年と2007年に慶尚南道の教員たちにキミ子方式の授業を体験してもらったところ、「そっくりに描けて嬉しい」「児童にも味合わせたい」という感想がほとんどであり、「創意的な表現」を求める声は一つもなかった。これは教育課程の目標や抽象表現を尊ぶ世間の風潮とは完全に逆向きの志向と言えるが、わが国同様、競争原理によってさまざまな問題が深刻化する韓国でも、競争的な「創意性」ではなく、共生的な「普遍性」に根ざした美術教育改革が必要であろう。

Keywords : キミ子方式, 美術教育, 創意性

1 はじめに

2000年6月「環境教育プログラム—韓国に新しい教育運動を—」に、キミ子方式と呼ばれる絵画指導法¹⁾の考案者である松本キミ子氏が招かれ、仁川教育大学をはじめ、ケグザンイ学院、栗谷教育研修院、亜州大学校²⁾で「もやし」「イカ」「毛糸の帽子」「色づくり」の授業が行われた³⁾。このときの様子は冊子『創造画はどうするのですか?』⁴⁾に詳しくまとめられており、これによると、その2年前の1998年には仁川教育大学で韓国版『三原色の絵具箱』の本作りの撮影が行われたとある⁵⁾。したがってキミ子方式と韓国の関係は、1990年代の後半頃から始まったと見て良さそうであるが、何より冊子の表題が示す通り、韓国を訪問した際に「創造画はどう描かせるのか」という質問ばかりを受けた経緯や、松本キミ子自身の創造画に対する考えが綴られている。

2006年1月、小学校教員30名を対象とする職務研修「韓国画の基礎とキミ子方式」に、筆者らがキミ子方式の講師として会場である晋州教育大学に招かれた。「色づくり」「もやし」は晋州教育大学のユン・サンウン教授が受け持ち、「イカ」「毛糸の帽子」「空」を松本が、「はがき絵」「大根」「海苔巻き(ペン画)」を伊藤が担当した。その研修の様子をまとめたレポートは、キミ子方式の機関紙(月刊)に3度に渡って掲載され、全国の読者に報告された⁶⁾。このときの松本の文章でも、「創造画ってどう教えるの」と研修期間中に何度も質問された出来事について触れた。

翌2007年1月にも晋州教育大学で職務研修「キミ子方式の絵画と塑像」が行われ、「色づくり」から「大根」に至るまでの初級題材⁷⁾をユン教授が担当し、筆者らが「髪の毛」「似顔絵」「サバ」「お団子ひとつの動く人」の中級題材⁸⁾に加え、塑像による「サツマイモ」と「カボチャ」を指導した。

本稿は、韓国の教育事情に関する調査結果とキミ子方式を体験した韓国の小学校教員の感想文から、美術教育のあり方について考察を試みるものである。

2 上昇する教育熱

韓国の教育熱の高さは社会現象として我が国でも広く知られているところである。韓国の町を歩くと、日本での「塾」に当たる「ハグウォン(学院)」がビル中にひしめいていることに驚かされる。この国の教育熱は私教育⁹⁾への大きな依存という性格を持っている。塾などの私的な教育機関に通う子どもの割合は、1980年から2003年までの23年間で小学生に限っていても実に6倍以上の伸びを示している(表1)。

表1 私教育を利用する児童・生徒の割合(%)

調査年	1980	1990	1997	2000	2001	2003
小学校	12.9	-	72.9	73.5	70.5	83.1
中学校	20.3	31.0	56.0	50.7	63.9	75.3
高校	26.2	12.6	32.0	39.8	48.3	56.4

当然その伸びに伴い、子どもにかかる教育費は増加し続け、2003年に韓国全体で費やされた私教育費は総額で1兆6千億ウォン（日本円に換算¹⁰⁾すると約1兆6千億円）となり、国内総生産（GDP）の2.3%に当たる。これは子ども1人につき1ヶ月平均で23万8千ウォン（約29,000円）が私教育費として払われていたことになる。日本における習い事にかかる費用の総額が毎月平均14,000円弱¹¹⁾という結果と比較すると2倍もの額である。

韓国の小学生が1週間のうち習い事に費やす時間に関しては、チャン・ヒョンスンが調査をしている¹²⁾。表2を見ると、「8時間以上」が39.4%で最も多く、次に「5時間以下」が34%で続くという二極化が見受けられる。月所得が多いほど「8時間以上」に偏っていることが分かる。

またチャンは、1ヶ月にかかる私教育経費を1ヶ月当たりの所得額別に調べている（表3）。月所得額が150万ウォン（約18万円）以下の家庭では小学生の子ども1人当たりの私教育費は「1万～10万ウォン（約1,200円～1万2千円）」が最多（53.3%）であるのに対し、所得が多いほど私教育にかかる経費は高くなり、月所得額が300万ウォン（約36万円）以上の場合では41万ウォン（約5万円）以上払っている家庭が35%で最も多い。これらのデータから保護者の所得により私教育の利用は時間的にも費用的にも二極化していることが分かるが、教育環境が家庭の所得によって大きく左右される点は日本と共通している。

世帯収入に占める私教育費の割合については、イ・ソンヒョンの論文¹³⁾に見ることができる（表4）。表には複数の子どもがいる世帯も含まれていると考えられるが、子どもの入試に賭ける韓国の親の情熱が浮き彫りになっている。

3 教育における諸問題とその要因

韓国では子どもたちが下校後も夜遅くまで複数に及ぶ塾を通過する姿が一般的である。また、近年、私教育のスタイルは多様化してきており、例えば「教育留学」とは、学齢期の子どもを海外の学校に入学させ、母親は身の世話をするために共に海外に渡り、父親だけが韓国に残ったまま稼ぎを送金するというものである。このような父親は「キログアッパ（雁のお父さん）」と呼ばれ、社会問題として大きく注目されている。韓国の教育事情は子どもたちだけでなく、大人にも過酷な競争を強い、超過のストレスを与えている。

これほどまでに教育に費用を注ぐ理由としてホン・ホシクは4つを挙げている。やや長文ではあるが、翻訳して引用する¹⁴⁾。

1つ目に不十分な公教育サービスである。公教育は国家の財政支援を受けられるだけでなく、その他にも法律的保護を受ける反面、多くの制約を受

表2 月所得別小学生が一週間の習い事に費やす時間 (%)

所得時間	150万ウォン以下	150～200万ウォン	200～250万ウォン	250～300万ウォン	300万ウォン以上	全体
5時間以下	46.9	39.7	36.2	23.7	27.5	34.0
6時間	-	11.1	17.0	13.2	5.0	10.8
7時間	13.3	9.5	4.3	-	12.5	7.4
8時間	6.7	6.3	6.4	15.8	7.5	8.4
8時間超	33.3	33.3	36.2	47.4	47.5	39.4

表3 月所得別私教育経費の占める割合 (%)

所得経費	150万ウォン以下	150～200万ウォン	200～250万ウォン	250～300万ウォン	300万ウォン以上	全体
1万～10万W	53.3	20.6	17	7.9	2.5	16.3
11万～20万W	26.7	34.9	44.7	26.3	17.5	31.5
21万～30万W	13.3	28.6	14.9	36.8	22.5	24.6
31万～40万W	6.7	14.3	12.8	21.1	22.5	16.3
41万W～	-	1.6	10.6	7.9	35	11.3

※Wはウォンを示す

表4 世帯収入のうち私教育費の占める比率 (%)

比率校種	0～9%	10～19%	20～29%	30～39%	40～49%	50%以上
小学校	20.4	35.4	21.6	14.6	5.3	2.8
中学校	16.7	35.9	22.4	15.4	5.2	4.5
一般系高校	19.4	32.9	22.9	13.1	7.5	4.2
実業系高校	32.4	28.9	16.7	7.1	6.4	8.7
全体	19.7	34.9	21.8	14.3	5.6	3.6

けている。学生選抜、教育課程（訳者注：日本では学習指導要領に相当）の運営、授業料の決定、その他学校経営全般において画一的であり、硬直した制度の中での運営を強いられる。そのため、過密学級や学校経営の問題が放置され、より個人

に対応した教育を与えられないために、教育の需要者が公教育に満足できず私教育に依存する。

2つ目は、不合理な大学入学選考制度である。私教育は大学入試制度の形と不可分な関係にあるため、大学入試制度がどのように実施されるかによって私教育の需要が決定されるといえる。現行の大学入試選考制度は国家が施行する修学能力試験、大学別試験、高校の内申成績などを主な選考資料にしている。つまり、学業成績の相対的順位が選考基準に設定されている。相対的順位の追及は子どもと保護者を無限の学力競争に押し出す。

3つ目に、高学歴を追求する社会的病理現象と過度な入試競争が挙げられる。韓国では高学歴は高賃金に結びつくという意識が高い。1997年の時点で上場企業の役員総数は8,160名になるが、そのうち81.0%が大卒以上の学歴を持っており、特にソウル大出身者が全体の22%を占め、高麗大及び延世大を含めたいわゆる三大名門の出身者が全体の40.7%を占めている。解放後急激に政治・経済的変化と経済発展による人材需要が急増し、身分制度の崩壊以後、学校制度を通じた社会的地位分配、儒教に根づいた宗門主義と家族主義等の諸要素が結合し、韓国社会の学力主義は西欧の産業社会や日本と比べて急速に進行した。最悪の経済基盤の下、相対的に不足にならざるを得ない仕事の席を得るため、また経済的恩恵と社会的地位を得る手段として、高学歴追求傾向はついに社会的病理現象にまで変貌した。

4つ目に社会の経済的要因が挙げられる。韓国の私教育需要の拡大には経済成長だけでなく、人口増加を抑制するための政策の成功も大きな影響を与えた。人口抑制を通して1人当たりの国民所得が増加した反面、子どもの数は1人もしくは2人と急速に減少し、これに伴って保護者が子どものために犠牲にできる経済的な余裕が生まれることになった。

ホン・ホシクによるこうした韓国における教育熱の理由に関する分析は正論であろうが、教育諸問題の根底には教育界の努力だけでは如何ともし難い複雑な要因が存在している。そのため問題の解決には、政界や経済界を動かすほどの世論の高揚が不可欠である。そのために教育者がすべきことは先ず、良い授業実践を積み重ねていくこと、それからそのことについて報告やアピール活動を怠らないことであろう。

4 美術教育の現状

韓国において教育への意識が高いことは前章までに述べた通りであるが、美術教育もまた例外ではない。表5は或る小学校で児童の通う習い事の分野について調査をした結果であるが、全体の24.4%が美術を習

表5 月所得別の私教育領域毎に占める児童数の割合(%)

所得領域	150万 ウォン 以下	150～ 200万 ウォン	200～ 250万 ウォン	250～ 300万 ウォン	300万 ウォン 以上	全体
英語	35.7	48.4	51.1	78.9	65.0	57.2
ピアノ	35.7	37.1	57.4	57.9	45.0	47.3
学習紙※	28.6	24.2	42.6	26.3	55.0	35.3
テコンドー	28.6	30.6	21.3	28.4	35.0	26.9
美術	28.6	30.6	21.3	21.1	20.0	24.4

※問題用紙を配布し解答を添削する公文式のような形態の学習塾

い、数多い習い事の内、5番目に多く選択されている上、家庭の経済環境に関わらず満遍なく分布していることから、美術は一般的な習い事であると言える¹⁵⁾。

実際、韓国の町では「美術学院(ミスル・ハグウォン)」と書かれた看板を頻繁に目にする。美術教育に何らかの価値観を見出しているからこそ多くの子どもを美術の塾に通わせるのであろうが、韓国ではどのような価値観の下で美術教育が行われているのであろうか。

日本の学校教育の内容については文部科学省の定める学習指導要領に依るところが大きい。日本の学習塾は間接的ではあるものの、その教育指針には指導要領の影響を受ける。なぜなら塾が主として学校教育の補足という性格を持つからである。これは韓国においても共通する点である。

さて、日本の学習指導要領にあたる韓国の教育課程美術編の内容をみると、韓国の小学校低学年には日本で言う「図画工作」という教科は存在しないことが分かる。その代わりに体育・音楽・美術の3教科を統合した科目である「楽しい生活」の一部分がその役割を果たしている。

「楽しい生活」の総括目標¹⁶⁾は「多様で楽しい活動を通して健康な心身を育成し、創意的な表現能力と審美的態度を培う」とあり、下位目標¹⁷⁾は次のようになっている。

- 遊びと表現活動を通し健康的な心身を育て、思考と感覚を多様で楽しく表すことができる。
- 鑑賞活動を通して対象に興味・関心を持ち、美しさを感じる。
- 遊びと表現、鑑賞活動を通し、身体的、音楽的、造形的活動の基本要素を理解する。

3年生以降になると、「楽しい生活」の一部が「美術」という教科として独立する。総括目標に「美術活動を通して表現及び鑑賞能力を育て、創意性を啓発し、審美的態度を培う。」とある。また、下位目標

として次の3つが掲げられている。

- 美的対象の価値を発見し理解することができる。
- 感じたこと, 思ったことを創意的に表現することができる。
- 美術品の価値を判断し, 美術文化遺産を尊重することができる。

日本の学習指導要領における図画工作科の目標は, 「表現及び活動を通して, つくりだす喜びを味わうようにするとともに造形的な創造活動の基礎的な能力を育て, 豊かな情操を養う」とされるが, 「創造」の字義を広辞苑で調べると「新たに造ること。新しいものを造りはじめること。」とある。

一方, 韓国の教育課程の目標に表れる「創意」について現地の国語辞典¹⁸⁾で引いてみると, 「今までなかったことをはじめて考え出すこと。また, その意見。」と書かれている¹⁹⁾。

美術という教科において培うべきものを韓国では「審美的態度」, 日本では「豊かな情操」と異なる部分があるものの, 表現活動の中で「新しさ」を追求する側面は両国で共通していることが分かる。

韓国では美術の教科内容は大きく3つに分かれており, 「美的体験」「表現」「鑑賞」で構成される。これらの3つの領域について教育課程では以下のように説明がされている¹⁹⁾。

- 「美的体験」は対象の美しさを発見, 感じる事ができ, 自然と造形物に興味・関心を持ち, 愛好するようになる場所に重点を置く。
- 「表現」は感覚と考えを自由に, 多様に表すことができることで表現活動に興味・関心を持つようにし, 創意的活動の基盤になる基礎能力を育成するようにする。
- 「鑑賞」は互いの作品と美術品を見合う活動に興味と関心を持ち, 美術品の特徴を理解し尊重するようにする。

日本の図画工作科の内容は, 「表現」と「鑑賞」の2つの領域に大分できるが, 表現は(1)「楽しい造形活動をする」と(2)「絵や立体に表したり, つくりたいものや工作に表したりする」の2項目があり, 鑑賞と合わせて3つの項目で構成されている。(1)が「遊びの性格を持つ」ことを考慮すれば²⁰⁾, 「遊び」と「表現」, 「鑑賞」に焦点をあてている点は両国において共通していると言えよう。つまり, 日本の図画工作と韓国の美術は非常に似通った教科の目標と内容を持ち, 両国がほぼ同じ価値観の下に美術教育を展開させていると考えてよい。

2005年, ロ・スサンは, 韓国国内における児童美術教育に関する保護者及び教師の認識を把握する目的で, 「児童美術研究の集まり」の会員(約1,700名)を対象にアンケート調査を実施している²¹⁾。回答収集地は韓国全国区, 会員は美術学院(美術の塾)及び教習所の教

師, 幼児教育機関と小学校に勤務する教師及び美術教育に関心の高い保護者である。対象となった教師のうち, 美術専攻者は51.3%, 非専攻者が48.7%であった。

先ず「美術教育において重点を置くべき能力は何か」という設問に対し, 該当する項目を全て選ぶという方法で回答を得た結果が表6である。「自分の思いを創意的に表現する能力」を選択した比率が, 教師・保護者とも43%を超え, 最も高い。これは, 教育課程の目標にある「創意的」という文言からの影響を受けているものと思われる。

この価値観は次の質問の回答にもよく表れている。「児童の美術作品で最も高く評価されるべき点」として, 用意された4つの項目に順位をつけるという方法で回答を得た結果が表7であるが, 「他人が考えない独創的²²⁾な発想」を最も多く選択している。ここで, 新しいこと, 他人と異なることを良しとする傾向が明確になった。「仕上りの見映え」を選択した回答は最下位であり, 漠然と「他人とは違うこと」が追求される風潮は, 日本も韓国も共通で, 「個性」というものが競うべき事柄として認識されている。

5 キミ子方式を体験した教師の声

キミ子方式は使用する道具や描き進め方についても具体的な指示のある美術の授業方法で, 教育課程の「他人が考えない独創的な発想」に基づく制作が意味するやり方とは対峙する方法であると言える。

それでは, 2006年と2007年の職務研修(1章参照)に参加した韓国の教師たちは, キミ子方式をどのように受け止めたのであろうか。キミ子方式の授業を実際に体験した30人の教師たちの感想文からその反応をつかむことにするが, 紙幅の都合により一部分だけを抜粋して掲載する。

①色づくり

- 楽しい時間を過ごさせてあげなければならない。キミ子方式はまさにそういうものだと思った。
- 誰でもできて, 負担もない。新しく面白い経験ができて嬉しい。
- ウキウキして楽しい。子どもたちが楽しめることを期待する。
- 多様な作品ができあがるのが不思議だった。
- 子どもたちに教えたら, 楽しい授業時間になりそう。
- 今まで絵に自信が無かった子にキミ子方式で勇気をあげなければ。
- 「とにかく描くのだ」という固定観念が剥げ落ちるようだ。

②もやし

- キミ子方式の研修は衝撃を与えてくれる。
- 本物みたい。子どもたちがとてもよろこんでくれそう。今この時間がとても楽しい。

表6 美術教育において重点を置く項目についてのアンケート結果 (%)

対象	項目	対象を写実的に描写する能力	自分の思いを創意的に表現する能力	材料と用具を適切に使用できる能力	日常生活において美術に関する分野を楽しむ能力
保護者		10.9	43.7	21.6	23.9
教師		12.1	43.2	18.8	25.9

表7 児童の美術作品において最も高く評価されるべき点についてのアンケート結果 (%)

対象・順位	項目	新しく多様な材料の使用	仕上がりの見映え	他人が考えない独創的な発想	授業態度及び材料準備
保護者が選ぶ	1位	12.5	1.6	73.1	12.8
	2位	55.5	6.7	17.1	20.8
	3位	24.1	19.3	7.2	49.3
	4位	7.9	72.6	2.2	17.3
教師が選ぶ	1位	7.2	1.3	80.0	11.5
	2位	56.1	3.0	14.9	26.1
	3位	26.5	17.9	4.6	51.0
	4位	10.3	77.7	0.3	11.6

- うちのクラスの子どもたちにも教えてあげたい。
- 私がこんなに絵が上手だなんて知りませんでした。とっても楽しい!!!
- 絵を描いてこんなに満足したのは初めてな気がする。子どもたちもこうして描いたらとても喜びそうだ。
- もやし1つを描くのに集中し、のめりこんでしまう。これほど神経集中に打ってつけの勉強があるだろうか。
- 不思議で驚くばかりだ。三原色と白色だけで本物と見間違えるもやしを描けたという事実で我ながら満足する。固定観念を完全に打ち砕いた。それこそ生まれてはじめての方法に満足!

③イカ

- 展示された絵の中で、自分の絵を探したが、時間がかかった。レベルの低い絵が無くて…。私の絵の実力がこんなにもつまらないものだとは知らなかった。キミ子方式を学びながら、これまでの私がだんだん小さくなるような気がする。
- 現場で使えばどんなに楽しいだろう。子どもたちは無限の喜びで満ち、自信が付きそうだ。
- うちのクラスの子どもたちも今日習った通りに教えて絵を描く楽しさを味わわせてあげたい。
- 新しい方法を知るといのは本当に嬉しいことだ。
- 先生が詳しく説明してくださって、分かりやすかった。多様なイカの絵を見て感嘆した!

④毛糸の帽子

- 子どもたちが喜びそう。三原色でモノの色を作って作品を完成させる面白さにふけた時間でした。まだ不慣れで不足なところはありますが、現場で子どもたちに教える日が待ち遠しいです。

- 素敵、私の絵!
- それぞれの作品から冬を暖かく過ごせそうな毛糸の帽子の感じがよく出ていた。固定観念から抜け出して自由に表現できるため、心に余裕がある。
- 多様な絵(作品)にたくさん触れました。みんなすごいです。
- 完成の喜びを味わった。素朴な感じも良かった。
- 絵を楽しく描けるのが気持ち良かった。私のクラスの子どもたちも私みたいに可愛らしい毛糸の帽子を楽しく描けそうだと思うと気分がいい。

⑤空

- キミ子方式を一つ一つ学びながら普段持っていた疑問が一つ一つ解決していった。絵が描けない子には自信を、絵がもともと上手な子には新しい表現方法に触れさせる良い方法だと思う。
- 良いもの学べる時間だったので、子どもたちとともにする美術の時間が待ち遠しい。もっと一生懸命努力しよう。
- 先生の詳しい説明がとても特徴的で印象的だった。子どもたちに色々な経験を積む機会を与えられそうだと思うと嬉しい。
- 子どもたちを指導するとき体系的に自信を持って指導するのに役立ちそうだと感じた。
- 簡単に誰もが上手に描けること。早く絵と仲良くなれるコツ。全くその通りだと思います。本当に簡単に描ける。
- 楽しい美術の時間。

⑥はがき絵(イチゴ)

- キミ子方式は学べば学ぶほど面白く、興味深い。
- 果物の味と香りを感じながら描くのは楽しく、絵も生き生きしている。



写真1 色づくりをする韓国の教師



写真2 サツマイモ・カボチャの塑像作品

- 始めはこんな小さなものをどうやって描くのかと疑問だったが、説明通りに少しずつ描いていったら、食べたくなるほどおいしそうな、とても素敵な苺の絵になった。
- 参考作品を見たとき、どうやったら苺をおいしそうに描けるのかと心配になったが、キミ子方式の詳しい説明どおりに描いたら、それなりの苺が描けて気分がいい。
- 本当に面白い。こんなにも上手に苺が描けるなんて…キミ子方式で描いた苺のハガキをあちこちに送らなければ。そして、新学期が始まったら学校の子どもたちともやってみなければ!!絶対!!

⑦サバ

- 今度キミ子方式で作品を描いて美術協会の展示に出品してみようか?と思った。
- サバとにらめっこをして筆を持った。筆によって感じが違うのが不思議。キミ子方式で描いてみるとモデルよりももっと新鮮に表現できたので気分が良かった。
- かっこいいサバが完成した。本当に生きて動きそうなサバが描けて感動的だ。サバの姿を詳しく観察して描く機会はなかなか無いぞと思い、熱中して描いた。学校の子どもたちとも描きたい。
- キミ子方式は絵だけでなく児童の観察力を育てるのに絶大な効果を発揮するだろうと確信した。
- サバを描きながら、さらにモノを観察する力が育ったような気がする。

⑧お団子ひとつの動く人

- 今まで人をクロッキーしたことがなかったが、今日いい経験をした。すぐに児童たちと一緒にやってみよう。我ながら得意な気持ちになる。動く人の姿をクロッキーできるという思いに、なんだか舞い上がっているよう。
- 面白かった。教える順序や方法も面白かった。モデルをかわるがわるの時間内に描くのは簡単ではな

かったが、新しい経験でとても面白かったし、私がこんなにも速く上手に描けるということが本当に嬉しくて驚いた。

- 今後の授業時間が楽しくなりそうだ。人物を描くのに自信がなかったが、やっと自信がわいた。本当に充実した研修になった。ありがとうございます。
- 簡単な方法でクロッキーをすることができて良かった。周りの人たちを描いてみると親近感がたっぷり感じられた。現場で子どもたちの誕生日パーティーをするとき、このクロッキーをハガキに描いて「誕生日カード」にすれば、友情も熱くなるだろうと期待できる。

⑨サツマイモとカボチャの塑像

- 最後まで作りあげた後の喜びが大きかった。…キミ子方式をたくさん宣伝して、児童たちに負担のない美術の時間になればいいなと思った。
- 本当に素敵なカボチャができた。本当にやり甲斐があり、現場で使ってみようと思った。
- 作り始めの一点からはじまり、部分から全体に展開していくことで、ずっと体系的に、また容易に作り進めることができた。細かく観察すること、質感を感じてみるなどによって、モノと通じ合うようになり、親密感を感じるようになった。
- 本物そっくりに作れて自負心が生まれた。児童たちにもこんな気分になってほしいと思った。
- 児童たちにもこの感動を伝えてあげられたらうれしい。紙粘土のかたまり自体に負担を感じている子どもにも良い方法のようだ。
- 作ってみたら、どれも本物そっくりで驚きました。子どもたちと是非作ってみたいと思います。
- 紙粘土を一つずつくっつけて完成させていくキミ子方式で作ると、よりうまくできるようで、順序通りに作っていけば誰でも上手にできるということを理解できた。

6 美術教育のあり方についての考察

前章で紹介したようにキミ子方式を体験した教師たちの感想文は「そっくりに描けて嬉しい」や「満足」といった内容がほとんどを占める。このことから、満足感とは「本物そっくりに描けること」と深く関わっていることが分かる。一方、「本物そっくりで創造性に欠け、不満である」という声は1つもなかった。さらに、自らが満足するとともに「子どもにも味合わせたい」という一節が添えられたものが数多く見受けられ、教師たちは子どもたちも本物らしく描けることで喜びを味わえるであろうと考えていることが分かった。これは表6, 7の結果や世間一般の風潮や価値観、教育課程の文言とは逆向きの志向であり、キミ子方式を体験した教師の理解と既成の価値観との間には大きな溝があることがはっきりとした。

韓国に限らず、美術教育の世界においては「創意」「自由」「個性」「感性」「自分の思い」などの言葉がこれまで強調され過ぎてきた感がある。このような教育が目指すところの危険については、過去の拙稿においても度々指摘してきた²³⁾。こうした「個性を煽る教育」が氾濫する社会の構造について、土井隆義は文化社会学の立場から以下のように解説している。

- 个性的であることを望む人が多くを占める以上、それは現代における1つの規範となる。感覚や内発的な衝動をも「個性」として捉え、それらは優先されるべきものとして位置づけられている。
- 現代社会では、自分の感情や行為の妥当性を計る基準は社会的根拠ではなく、自分の内部にある。言葉の社会的説明力の強さではなく、自らの内発的衝動の切実さこそ重んじるべきであると信じられる。次第に他者の存在は希薄になり、言葉による根拠を与えることにさしたる意義を見出せなくなる。
- ところが実際は、自分の信じる「自分らしさ」の根拠の正体は客観性を欠いた主観的な思い込み、いわば「根拠なき自信」に過ぎない。実は自分自身でも単なる思い込みが社会的には通用しないことは薄々勘づいているため、絶えざる不安に脅えることになる。彼等は「个性化的な自分」の発見へと際限なく煽られているのにも関わらず、しかしその絶えざる焦燥のなかで実際に発見できたものといえば、「个性化的な自分」の根拠の不確かさでしかない。
- その結果、不確かな「個性」への不安に耐え切れず、他者からの肯定的な評価によって、その重さを支えてもらわなければ安心できなくなっている。

土井の「言葉によって構築された思想や心情が時間をこえて安定的に継続しうる」²⁴⁾という指摘は手段の差こそあれ、表現の一つの形である限り美術でも同様のことが言える。人間社会において相互理解を助ける媒介が言葉だとしたら、美術におけるそれは、写実的表現、つまり、そっくりに描けることや作ることであ

ろう。誰もが共通して理解できる表現からは他者と分かち合える安心や安定感が生まれてくる。図画工作や美術においても他人との違いを過剰に強調することは、他人との共通理解の断絶を招き、分かち合えない不満が膨らむことになりかねない。「他人などどうでも良い」という価値観と「他人に認められたい」という欲求のジレンマに苦しむ子どもたちを授業で救うことが急務である。

子どもたちに他人との違いを強要することは実は教師をも苦しめることになる。授業者自身が賛同できないような「個性」や「新しさ」を目の前にして、客観的な評価をすることは不可能である。評価が不可能になれば、より一層の発展を促す指導などできない。自らの理解を超えたものに向かい合ったとき、それに対する働きかけは空虚な装いでしかありえない。

また、教師のいたずらな誉め言葉は、自分の作品の良し悪しを判断しかねる子どもに対して「根拠なき自信」を提供することにもなる。子どもたちにとっても、自分の理解を超えた作品に共鳴することはできず、そこに分かり合える共生的な喜びは皆無である。

キミ子方式を体験した慶尚南道の教師たちは、そっくりに描けることで得られた満足感を学校の子どもたちにも是非味合わせたいと願っている。その望みは、今日の主流となってしまった美術活動に対する通念や教育課程に書かれた理念とは全く逆の方向性を持つものかもしれない。しかし、彼らこそが生の子どもたちの現実を知る教育最前線の担い手なのである。

人間は「社会的動物」であるため、大抵の人は社会の規範や風潮に従って思考し、行動する。それは子どもだけでなく、世間一般の大人も、そして教師ですらその例に漏れない。それでも、教育家の高橋幸子は次のような言葉で警告を発する。

強迫も従属も、教育から遠い²⁵⁾

と。

指導要領や教育課程等に現れる文言は、教師の思考



写真3 2006年慶尚南道職務研修の参加者と
(最前列左より、ユン教授、松本、伊藤)

を硬直化させる傾向が疑われる。わが国において学校現場を訪問すると、「図画工作の指導法がよく分からない」という声をしばしば聞くが、その声に混じって「自由」「発想」「個性」「創造」「感性」の決まり文句が登場する。韓国の小学校教師の多くも美術の授業の難しさに悩み、どのように指導したらよいか分からずに苦労しているとユン教授（前出）は言う。

日韓の今後の美術教育のあり方については、競争的「創意性」ではなく、他人と理解し合えるような共生的「普遍性」に根ざした授業の実現に向けた教科目標の改正が望まれる。

7 おわりに

韓国慶尚南道におけるキミ子方式を採り入れた職務研修はユン教授の尽力なくしてあり得なかった。氏はキミ子方式に関連する著書の翻訳²⁵⁾等、多方面において韓国でのキミ子方式の普及に尽力されている。彼の真摯な取り組みに敬意を表するとともに、改めて美術教育のあり方を考察する機会を与えてくれたことに感謝申し上げる。また、本稿の執筆に際し、文献資料の収集に協力してくださった金明花氏にもこの場をお借りして感謝したい。

注

- 1) 『現代教育学辞典』(労働旬報社, 1988)に「美術入門のための教育法」とある。松本キミ子が絵の描けない子から学んで1975年に開発した指導法で、描き始めの1点を決め、三原色と白を混ぜて色を作り、隣となりと描き広げ、紙が余れば切り、足りなければ足し、最後に構図を決めるのが特徴。
- 2) 大学名の表記は冊子『創造画はどうするのですか?』(注4参照)に従った。
- 3) 「色づくり」「もやし」「イカ」「毛糸の帽子」の題材を『変わらぬ精神・変わってきた教え方』(美術の授業研究会・キミ子方式研究会, 2000, pp.109-111)では「基礎4テーマ」としている。
- 4) 松本キミ子が2000年に著した15頁構成の記録冊子。
- 5) 韓国版『三原色の絵具箱』は全2巻構成で、美術公論社(韓国)から1999年に出版された。日本版は全3巻で1982年の発行(現在は絶版)。
- 6) 月刊機関紙名は『The Beginning News』, キミコ・プラン・ドゥより毎月2000部を発行。(伊藤仁香「伝わる確信に伴う大きな喜び」2006.5, ユン・サンウン「伝わる確信に伴う大きな喜び(その2)」2006.6, 松本昭彦「自由に描けるようになるために」2006.7)
- 7) キミ子方式通信講座の初級入門コースには「色づくり」「もやし」「イカ」「毛糸の帽子」「空」「はがき絵」「カメ(またはザリガニ)」「ニンジン(または大根)」の8題材に「誰かに教えて」を加えた9つのテーマがある。
- 8) キミ子方式通信講座中級卒業コースには「ネギ(または季節の草花)」「髪(毛)・似顔絵」「サバ」「お団子ひとつの動く人」「バケツ」「季節の果物」「自画像」の7題材に、「誰かに教えて」を加えて計8つの課題が用意されている。
- 9) 韓国では公教育と対比して「私教育」とする。
- 10) 1ウォンを0.12円で換算した。
- 11) ベネッセ教育情報サイト『いまどきの「習い事」事情【後編】』による。URLは以下の通り。
<http://benesse.jp/blog/20050921/p2.html>
- 12) 장현순(チャン・ヒョンスン), 「小学生の私教育活動に関する実態調査」, 慶南大学校教育大学院 生涯教育専攻修士論文, 2003, pp.21-23
- 13) 이성현(イ・ソンヒョン), 「韓国社会の私教育実態と問題点及び解決法案についての研究」, ヨンナム大学校教育大学院 共通科学教育専攻修士論文, 2006。イ氏は韓国教育開発院が行った2003年の調査結果を引用している。
- 14) 홍호식(ホン・ホシク), 「私教育費実態と軽減法案」, ヨンナム大学校行政大学院 政治学科政治広報及び選挙専攻修士論文, 2005。翻訳は伊藤による。
- 15) 前掲論文12) pp.19-21
- 16) 日本の学習指導要領では「教科目標」に該当。
- 17) 日本の学習指導要領には「下位目標」に相当するものはないが、教科の目標(総括目標)を達成するための関連目標と考えて良いであろう。
- 18) 金星出版社辞書部編著, 뉴에이스国語中辞典, 金星教科書, 1987, p1888
- 19) 翻訳は伊藤による。
- 20) 文部科学省, 小学校学習指導要領解説 図画工作編, 1999, p.16に「A表現」(1)「楽しい造形活動をする」項目について「思いつくままに試みる自由さがあり、遊びの性格(遊び性)を持つ」とある。
- 21) 로수산(ロ・スサン), 「児童美術教育に対する教師と学父母の認識」, 環園大学校大学院 児童学科児童学専攻修士論文
- 22) 韓国の国語辞典(注18参照)によると、「独創」とは「一人の力で新しく独特なことをはじめて創りだしたり、考案すること。また、その考案。」とある。
- 23) 松本昭彦, キミ子方式と大学生, 愛知教育大学教育実践総合センター紀要 8, 2005, pp.189-196 / 松本昭彦, キミ子方式と小学生, 愛知教育大学教育実践総合センター紀要 9, 2006, pp.53-60
- 24) 土井隆義, 「個性」を煽られる子どもたち — 親密圏の変容を考える —, 岩波書店, p33
- 25) 松本キミ子著, 尹雙雄(ユン・サンウン)・伊藤仁香共訳, 『그림을 그린다는 것은』(原書『絵を描くということ』) 仮説社, 1989), 韓国美術公論社, 2007
- 26) 高橋幸子「まえがき」, 鶴見俊輔・高橋幸子編著『教育で想像力を殺すな』明治図書, 1991, p.3